慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	二〇一九年度修士論文要旨；二〇一九年度卒業論文題目
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2020
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.89, No.1/2 (2020. 10) ,p.161(161)- 173(173)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20201000-0161

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙　報

二〇一九年度修士論文要旨

〔東洋史学専攻〕

一九世紀前半におけるイギリス人旅行家のオスマン帝国観
―イートンとソーントンの比較考察―

シルバーマン　剛

現代の欧米では反イスラーム主義などによるイスラーム教徒移民に対する大きな反発がみられるが、これは未だにイスラームへの差別意識が根強く存在していることを示している。本論文は、こうした反イスラーム主義の仕組みに対する新視点の提示を企図するものである。そして、一九世紀初頭にオスマン帝国を旅したイギリス人のオスマン帝国観を分析する方法的枠組みとしてのエドワード・サイードのオリエンタリズム論の有効性を検証することを目的とする。具体的にはイートンとソーントンの旅行記を用い、両者のオスマン帝国観が「東洋」に対する偏見や先入観、オスマン帝国への客観的視点のいずれに基づいているのかについて考察する。先行研究では、オスマン帝国を含む「東洋」に対するイギリス人旅行家の眼差しとオリエンタリズムの関係性がしばしば主張される傾向にある。本研究では彼らのオスマン帝国観がどの程度「オリエンタリズム」の要素を含み、またオスマン帝国の政治や宗教の諸側面でその影響が如何に現れているのかについて検討する。

第一章「一六世紀末～一九世紀初頭におけるイギリス人旅行家とオスマン帝国」では、イートンとソーントンによる旅行記執筆の歴史的背景、そして二人のイギリス人旅行家のオスマン帝国観に影響を与えたとみられる歴史上の諸要素について考えるため、当該期のイギリス・オスマン帝国関係史、イギリス人旅行家たちに関する通時的な概観とその特質、レヴァント会社やセリム三世統治下の改革などについて論じた。続く第二章「ウィリアム・イートンとオリエンタリズムの萌芽」と第三章「オスマン帝国の擁護者トーマス・ソーントン」では、イートンとソーントンの人物や性格、その特徴に注目し、旅行記の関連記述の比較考察を通じて両者のオスマン帝国観に含まれるオリエンタリズム的要素について多面的な分析を試み、その明瞭化を図った。第四章「イートンとソーントンの関係性」では両者の間で繰り広げられた論争を取り上げ、イートンとソーントンのオスマン帝国観の相違について検討した。そして結論として、シッファーの先行研究はイートンのオリエンタリズム的側面を強調したが、オスマン帝国のイスラーム教徒の風俗習慣に関する彼の記述には客観性が認められること、また、ソーントンのオスマン帝国への見方がオリエンタリズムの要素に多少影響されながらも、客観的な視点がより多く含まれている点を指摘した。また「オリエンタリズム論」を用いた分析でイートン

とソーントンのオスマン帝国観における両者の視点の新たな側面を確認できたことから、当該期のイギリス人旅行家を扱う研究における「オリエンタリズム論」の有効性は、シッファーの評価よりも高いという結論に至った。

中国国際共同管理論をめぐる北京政府外交

―臨城事件（一九二三年）を中心に―

宮脇　雄太

従来の「革命史観」では、一九二〇年代後半まで中華民国の中央政府だった北京政府が、「軍閥」支配のもと帝国主義勢力におもねり、ナショナリズムを抑圧したと否定的に評価されてきた。また「ワシントン体制」論では、日・米・英三カ国の協調システムにおいて、中国が従属的な地位にあったとみなされている。これらに対して近年の研究は、第一次世界大戦後の新たな外交の潮流の中で、北京政府の外交官が中国の国際的地位向上を図り、漸進的に条約を改正したと肯定的に評価してきた。

このように評価の相反する北京政府を理解するためには、その財政難と統治能力の低さという国内問題がいかに国際関係と関わったのかを論じる必要がある。そこで本稿は、中国の混乱状況を克服する手段として第一次世界大戦後に列強当局で検討され、中国国内にも大きな反響を及ぼした中国国際共同管理論を研究対象に設定した。とくに外国人乗客が人質となった臨城事件を取り上げ、列強一六カ国の公使団が中国の鉄道警備共同管理案を提起した経緯、その中国側の反応、北京政府の外交への影響を検討した。

その中で第一に、中国国際共同管理論は、北京政府の財政問題が背景にあったことを指摘した。パリ講和会議期・ワシントン会議期の構想は、いずれも北京政府の財政問題への問題意識に即しており、それが臨城事件での鉄道共同管理構想にまで継承されていたのである。

第二に、中国国際共同管理論の前提である北京政府の財政問題や統治能力への懸念は列強側と中国輿論で共有されていたために、中国国際共同管理論に対する両者の立場は隔たりが大きくなかったことを指摘した。「鉄路統一案」をめぐり対立した北京政界にせよ、帝国主義に抵抗するナショナリズムとして描かれがちな上海各界にせよ、列強当局や在華外国人にせよ、財政問題・憲法制定・兵力削減など中央政府の統治能力強化を望む点では軌を一にしていた。

第三に、中国輿論や列強当局、在華外国人の要求に応えようとした北京政府が、臨城事件当時の政治状況では、上海各界の重視する財政問題よりも、憲法制定や中央政府としての正統性維持を優先せざるを得なかったと論じた。そのために中国輿論は、内政干渉する列強と抵抗する中国という構図に単純化して事態を認識し、北京政府が国際管理を事実上退けたという外交的成果を無視したために、北京政府の外交はかえって正統性を損ねてしまったと、本稿では論じた。

〔西洋史学専攻〕

生存の糧を探して
―アンシャン・レジーム末期のマドリードにおけるアストゥリアス地方、ガリシア地方からの出稼ぎ労働者の経験

土肥野　秀尚

本研究は前近代における農村から都市への出稼ぎ労働者、具体的には、一八世紀から一九世紀初期にかけてのマドリードにおけるスペイン北西部アストゥリアス地方とガリシア地方出身者を対象とする。マドリードは一六世紀半ばのフェリペ二世期にスペイン君主国の首都に定められ宮廷都市として発展したため、家内奉公人などを中心とする労働市場が出現し、移民／出稼ぎ労働者の流入により急成長を遂げた。流入人口の中で、アストゥリアス・ガリシア出身者は、カスティーリャ地方出身者に次いで多数を占め、家内奉公人や御者、行商人や水売り、パン屋・製粉業者や木炭製造者などとしてマドリード経済の基礎を支えた。

都市における人口動態史研究は、教区簿冊や人口調査・住民簿を使った数量的研究に始まり、救貧院や警察の史料を使った貧者研究、徒弟契約や親方試験記録を使ったギルドに属する手工業者・商人の研究、遺言書や、死後財産目録、私的な書簡を使った特権的個人・家族の研究に見られる質的な研究が蓄積されてきた。しかし、都市の基礎的な経済を支えていた多くの出稼ぎ労働者は、史料の問題や歴史家の関心のため、「貧者」の枠組みで一つの均質的な社会集団として研究されるにとどまり、彼らが構築していた社会関係や稼いだ財産、家族・親族や同郷人を中心にとることができた戦略についての経験的な研究は不十分であった。

本論文ではマドリード公証人歴史文書館（Archivo Histórico de Protocolos de Madrid）に所蔵されているマドリード王立病院で残された遺言書と「貧困申告書（declaración de pobreza）」というマドリードにしか存在しない特殊な民衆の遺言書を用いて、マドリードにおけるアストゥリアス・ガリシア出身者の特徴、生活条件そして彼らが形成したネットワークと生存戦略を分析した。これらの史料に現れる賃金の未払いや現金の貸し借りの情報、すなわち、近世の特徴的な社会関係である「インフォーマルな信用貸しネットワーク」から出稼ぎ労働者独自の戦略とディアスポラ形成の要因の分析をすることが可能となる。

本論ではまず、一八世紀の最初、半ば、最後の各十年間をサンプルにとった人口、性別、婚姻状況、職業の数量的分析を通して、研究対象の全体的特徴を明らかにし、質的に研究すべき職業の特定を行う。続いて、出稼ぎ労働者の生活条件について、個別事例を通して彼らが直面していた様々な困難を説明する。最後に、生存の危機との境界にあったこれらの出稼ぎ労働者がいかなる生存戦略をとっていたのかを、家内奉公人、水売り、

パン屋・製粉業者、農業日雇い労働者・リネンの行商人といった代表的な職業に注目して分析する。「出稼ぎ」の視点を加えることで、これまで述べられてきた一般的な「貧者の生存戦略」を乗り越え、その先に多様な出稼ぎ労働者独自の戦略が存在したことが明らかになった。

ハンブルクにおける「アーリア化」一九三三―一九三八年
―ユダヤ人経営をめぐる社会的状況―

宮田　沙矢子

「アーリア化」とは、広義でユダヤ人への経済的迫害と生活基盤の破壊、狭義でユダヤ人の財産や経営の「アーリア人（ドイツ人）」への譲渡、売却といった財産移譲を指す。この「アーリア化」は、ナチ支配確立の一九三三年以降地域ごとに実行され、一九三八年一一月ポグロム後に全国的に過激化した。

一九九七年のフランク・バヨールによるハンブルクの個別研究以降、「アーリア化」の研究は多くの地域を対象に行われてきた。しかし長年、国家や地方行政機関、ドイツ人企業家や一般のドイツ人など加害者の関与についてのみ分析が行われていた。二〇一〇年代に新たな研究の潮流が生じ、被害者のユダヤ人経営に焦点が当てられるようになった。

これらの研究動向を踏まえ、本稿ではハンブルクの「アーリア化」について、一九三三年から一九三八年を対象に再検討した。イナ・ロレンツ、ヨルク・ベルケマン編集の史料集『ナチ国家におけるハンブルク・ユダヤ人一九三三年から一九三八／三九年』を利用し、行政史料、新聞記事、ユダヤ人共同体史料、日記や回顧録などの個人的史料を包括的に参照することで、従来の研究とは異なり、加害者、被害者どちらかではなく、両者の対応、行動とその相互作用を分析し、対象期間のハンブルクの「アーリア化」の特徴とプロセスの実態の解明を目指した。特に州、市当局との関係からイスラエル病院、国家総督、都市の経済諸機関およびライヒ経済省との関係からバイヤスドルフ株式会社、M・M・ヴァールブルク・アンド・カンパニーの事例を取り上げ、分析を行った。

一九三八年六月一四日の帝国市民法第三政令による「ユダヤ人営業経営」の法的定義まで、迫害対象となった経営の性質の把握は困難であり、各経営の経営状況、規模、重要性を考慮し、恣意的に判断された。経済的、政治的に不安定だったハンブルクでは、国家総督や市政府大臣など都市の指導者や政策実行機関の州、市行政の各当局には戦術的な慎重さが存在し、彼らは前述の状況のもと、反セム主義イデオロギーの貫徹より都市の利害を重視し「アーリア化」に関与していたことがわかった。また、ユダヤ人経営者には経営維持のための行動の余地を与えられ、彼らは事業内容の変更や集中化、人事改革などの実施が可能であった。都市の指導者、各当局はこれらのユダヤ人たちの行動にも柔軟に対応、時には譲歩、保護する立場をとってい

たことも明らかになった。

以上のような分析と考察を通して、「ユダヤ人営業経営」定義以前の「アーリア化」の分析に「加害者ドイツ人」「被害者ユダヤ人」という二項対立の視点は有効か、という問題が浮き彫りになった。今後は両者を「当事者」として同じく扱い、彼らが「アーリア化」を通じてどのように社会に「包摂」、「排除」されていったかを分析する必要があるだろう。

〔民族学考古学専攻〕

鳥浜貝塚出土ニホンジカ遺体の死亡時季
―非破壊分析に基づく再検討―

佐藤　巧庸

福井県鳥浜貝塚は「縄文のタイムカプセル」との代名詞を有するほど、縄文土器や石器に加えて、有機質遺物が良好な保存状態で大量に出土した。それらの遺物に対し、縄文時代における人間活動の復元を目的とした先駆的研究が、領域横断的な研究調査体制の下で多数取り組まれている。その中で、ニホンジカの狩猟時季については、冬季中心説（西田一九八〇、大泰司一九八〇）と夏季中心説（内山二〇〇七）の相反する二説が説かれており、それぞれの当否を検討することが遺跡の性格を考える上からも重要な課題となっている。そこで本研究では、鳥浜貝塚におけるニホンジカの狩猟時季の再考を試みた。

第一に両説の論拠となっている資料群を対象として資料観察と分析を行い、先行研究における死亡時季推定法の妥当性を方法論的に検証する。第二として、複数の実施可能な非破壊による死亡時季推定方法を用いてニホンジカの死亡時季の査定を試み、鳥浜貝塚におけるニホンジカの狩猟時季を再考した。

内山氏が提唱する夏季中心説は、ニホンジカの死亡個体欠落範囲への解釈、骨と歯のサイズ並びに、それらのプロポーションの異なる現生資料群と遺跡出土資料群を比較することに方法論的な瑕疵があり、支持し得ないことが分かった。対し、西田・大泰司氏によるセメント質年輪の検討に基づく冬季中心説については、一部の対象資料を再検鏡したが、今回観察できた資料数が少ないために、成果の可否について判断をしかねる。

その上で、①マイクロCTを用いたセメント質年輪の観察、②レントゲン撮影による歯の萌出・交換状況の精査、③周年的形成過程をもつ鹿角の出土割合の検討、以上3つの非破壊的な死亡時季推定を行った。①マイクロCTを用いた観察は、セメント質年輪そのものの形成が微小であることと合わせて機器の分析能の限界のために、現時点では困難であることを確認した。また、②歯の萌出・交換に基づく死亡時季推定の結果、雌ニホンジカの群れに伴う幼若獣の遺体は、秋季から冬季にかけて死亡した個体が集中していることを明らかにした。さらに、③雄ニホンジカのみに形成され、周年的に生え換わる鹿角を検討したところ、秋季から冬季に死亡した個体に由来する枯角が出土

鹿角の主体を占めており、それら鹿角は主に狩猟活動によって遺跡に持ち込まれたものである可能性を指摘した。非破壊的な手法を用いた分析結果、ニホンジカは秋季から冬季を中心として周年的に狩猟されていた可能性が高いと結論づけられる。

以上のように本研究は、縄文時代に生きた人々の生業の一端として、鳥浜貝塚で行われていたニホンジカを対象とする狩猟活動の時季を復元した。

下末吉台地東端部日吉地区における歴史生態学的研究
―縄文時代前期以降の堆積環境・植生変遷を中心に―

太刀川　彩子

歴史生態学は、人間の営為と自然の営力の関係史を紐解く領域で、人間と自然が関係し合うことで生じた歴史的産物を景観（landscape）と捉え、複数の分析手法や代替指標（プロクシー）を組み合わせることで景観形成史の復元を目指す。本研究の目的は、こうした「マルチプロクシー」の研究法を参照枠とし、異なる地形面で採取されたボーリングコアに対して複数の分析を組み合わせることによって、下末吉台地東端部に位置する日吉地区の人間活動と自然環境の関係史を描くことである。対象試料は、①鶴見川下流の沖積地に向かって開口する小谷戸「箕輪町」、②小河川が刻んだ小谷戸内奥「下田町」、③台地内の狭小な谷戸「蝮谷」という3地点で、浅層ボーリングによって採取したコアサンプルである。

研究方法は、土質の観察と放射性炭素年代測定、堆積スピード・粒径分析・珪藻分析による堆積環境の推定、花粉分析・プラント・オパール分析による古植生復元、考古学的情報や史料との照合である。堆積環境の様相については、堆積物の土質や粒径、含まれる珪藻化石、年代測定結果にもとづく堆積スピードの推定値をすり合わせることで検討した。また、堆積物中に残存する花粉やプラント・オパールの定量的分析から、台地上と低地の古植生変遷をそれぞれ推定し、縄文時代から中近世にいたる考古学的遺跡の分布状況と合わせることで、当地に暮らしていた人々と環境の関係史を推定した。結果、特に以下の三点の知見を得た。

（1）縄文時代前期は台地上にて多くの集落遺跡や貝塚が発見され、完新世の気候変動に伴う縄文海進期に相当する。この時期、台地上にはコナラ属コナラ亜属やクマシデ属―アサダ属を中心とする落葉広葉樹林が広がっており、南関東における植生変遷の傾向と整合する。ただし、地点①は標高二・四m以下に貝片混じりの浅海堆積物が認められるのに対し、地点②と③では縄文海進期の確実な堆積物は得られなかった。内陸からの堆積・浸食作用と、海進・海退による堆積・浸食作用がせめぎ合うなかで、各谷戸の環境は異なっていた可能性がある。

（2）日吉地区という比較的狭い空間で、地形条件が異なる地点を選定して花粉分析を行うことで、検出される植物群に地

点間で異なる時期と類似する時期が認められた。縄文時代晩期以降、地点①ではシイノキ属が優占種となるが、地点②ではアカガシ亜属とシイノキ属が拮抗して検出された。これは斜面部の傾斜など植物の生育条件の違いに因るものと考えられる。また、3地点すべての上位層において圧倒的なマツ属の卓越が認められ、江戸幕府による植樹の奨励に由来すると考えられる。

（3）プラント・オパール分析によって、地点①の縄文時代晩期以降の層から水田化を示唆する結果が得られた。しかし遺跡の分布状況は、縄文時代晩期の人間活動が当地でほとんどなかったことを示唆する。鶴見川の沖積低地に接する下末吉台地縁辺の小谷戸に水田が形成されるのは、台地上に大集落が形成される弥生時代中期後葉以降だった可能性が高い。

二〇一九年度卒業論文題目

〔日本史学専攻〕

昭和前期の朝鮮における内外地民間交流
—婚姻・文化事業・教育を通して—　井上　晴賀

近世近代内戦の描かれ方
—戊辰戦争・西南戦争を例として—　石崎　緋理

江戸時代におけるカクキュー八丁味噌の大豆仕入れの考察—上州、災害との関わりから—　今津　優香

昭和研究会の動向と知識人たちの対外思想変遷
—政治学者を例に—　木島　詩織

太平洋戦争下における娯楽政策と音楽
—戦時体制下を生きた音楽家たち—　障子　夏実

明治期から昭和期にかけての国語問題
—言文一致と標準語—　鈴木緒里恵

缶コーヒー市場の変遷　浪久　彩芳

日清戦後の教育勅語—文部大臣西園寺公望による教育勅語改訂計画を中心に—　難波　知希

坂本龍馬の現在における評価の妥当性
—坂本龍馬は本当に幕末の風雲児だったのか—　松岡　海

河田正矩の周辺環境と思想の検討　峯岸　雄太

大坂・堂島の米会所の形成とその発展について　天野　拓真

織田政権と朝廷

—信長と官位を巡る問題を中心に—　石川　雄大
英国のジャポニズム—一九世紀後半から二〇世紀初頭の英国での日本文化流行—　内山　美佳
江戸期「教育」と現代「教育」　小川　滉太
開港期の横浜における地理と開港場周辺村民の生活　久保寺　慶
大山御師の下総国における檀廻—檀家帳等の諸資料をもとにした村山坊と景弓家の比較—　黒石　彩花
私塾・蔵春園の研究　佐々木史哉
将軍家光の二人の「母」—江と春日局—　高橋　朝香
絵図から読み取る蝦夷・千島地域に対する江戸幕府の認識と政策の変化　露口　武士
幕末維新期における陽明学の受容—佐藤一斎・大塩中斎・春日潜庵を比較して—　中村鷹太郎
天正一四年「北条氏照朱印状」に関する諸考察　宮崎　宏輔
変わりゆく横浜の港、その進歩と発展の過程についての研究　佐々木花音
山科言継と二人の将軍—戦国時代を生きた公家—　高橋理佐子
「聖徳太子」の名と称号　公家　怜亮
准母—役割変遷とその分岐点—　田中　晶子
東京市電の「黄金期」経営の裏側　井出　正清
横浜鉄道の経営とその開業効果について　加藤　良佳
戦時金融金庫証券部による株式市場安定操作　久保田航祐
恤救規則による国費救済の実態—東京府芝区に焦点を当てて—　諸星　智輝
尾去沢鉱山と周辺地域の発展　吉田夏津子

〔東洋史学専攻〕

中国残留孤児報道：日中メディアが描いた中国残留孤児像—「読売新聞」と「人民日報」を例に—　稲垣ひより
「清真菜」の歴史と現在　沈　佳謡
一九世紀前半のエジプトにおける灌漑制度の近代化と社会変容　川村　隆真
「ナクバ」の起源—委任統治時代末期におけるパレスチナ社会の変容を中心に—　武田　美紀
古代祭祀の研究—祭祀に関わる文化人類学—　劉　幸
唐代における公主の政治関与—太平公主を中心に—　鈴木　雅愉
古代中国の房中養生—馬王堆漢墓出土資料を中心に—　長井　優樹
始皇帝の神仙思想—『史記』の記述の分析に基づいて—　長井　理紗
日本古代中世における死生観—死体は穢いのか—　若菜　勇太

イングランド人から見た一七世紀後半のエジプト
―宝石商エドワード・ブラウンの旅行記をもとに―　歌原　理美
オスマン帝国治下のアルメニア・カトリック教徒共同体
―一八世紀後半～一九世紀前半のイスタンブルとアレッポを中心に―　川瀬　桃子
イスラーム世界と中国における奴隷像の比較
―中世の文学作品を通して―　安良岡芽依
エジプト人女性のヴェールを抑圧と捉えるべきか
―女性の声とセクシャルハラスメントを中心に考える―　前田　夏香
オスマン朝のワクフ
―公共・相続・政治利用の側面を中心に―　大菊　紗良
クルド民族主義運動の変遷―ベディルハーン一族によるクルド文化復興運動を中心に―　萩野　千賀
セリム三世の軍制改革　内田　貴啓
オジェ・ギスラン・ド・ビュスベク『トルコ書簡集』から見られる「トルコ人」の日常と気質　衣川　泉
ヨーロッパとイズニク陶器の関係　小林　春奈
中世オスマン帝国におけるクルド人
―イドリス・ビトリスィーを例に―　坂口　安那
一六世紀のイスタンブルの市場
―カパル・チャルシュを中心に―　鈴木　佳苗
オスマン朝・サファヴィー朝を通してみる遊牧民の動き　高橋　瑞穂
イスラーム世界における女性の在り方の変遷とその考察　山本まいか

〔西洋史学専攻〕

第二次世界大戦におけるフランスの対独協力
―ピエール・ラヴァルの事例から―　横山　優人
トルーマン・ドクトリンとその狙い
―対外政策と国内政治の観点より―　松本　健嗣
「大量移民の時代」のブエノスアイレスにおけるイタリア人とその同化について　石澤　恵佑
アイルランドコミュニティの形成と同化に関する考察　藤生　遥向
アメリカ合衆国におけるメディアを使った大衆操作
―ドナルド・トランプの先駆者ヘッダ・ホッパーの事例から―　門間　洋介
ヒャルマル・シャハトの「戦争犯罪」―ナチス・ドイツの戦争準備への関与をめぐって―　酒本　泰輔
イギリス女性参政権運動におけるエメリン・パンクハーストの功績　塩田　円佳
「ドナルドと戦争」―ディズニー・スタジオによるプロパガンダ・アニメーションの特徴とドナルドの活躍―　清水　実緒
第二次世界大戦後のナチ党員の逃亡ネットワーク

―アドルフ・アイヒマンとクラウス・バルビーの事例から―　外和実希子
一九世紀英国における中世主義
―ウィリアム・ダイスの事例から―　錦　志帆
美貌の販売―マックスファクターの生涯にみる宣伝戦略―　船田　彩織
カスティーリャ王アルフォンソ10世の宗教政策
―特にユダヤ人をめぐって―　柳川　京子
フランス革命と女性の地位　西田　美帆
一九世紀後半から二〇世紀初頭のイギリスに移住した東欧系ユダヤ人移民　山本　桃子
宗教改革と政治―ヘンリー八世治世下における統治機構改革をめぐって―　伊藤　玉慧
一七世紀イギリスのコーヒーハウス文化とそれらがもたらした社会的影響　大内ありさ
ウェストファリア条約以降の神聖ローマ帝国における帝国と領邦の関係性―帝国裁判所の機能から見た帝国国制―　越智　文香
中近世のイタリア・フランスにおける娼婦の歴史
―娼婦と公権力の関係・高級娼婦を二軸に―　梶本　伶
中世イタリアにおける複式簿記の発展と成立　金子慶太郎
一六～一七世紀のドイツにおける「魔女狩り」の過激化とその要因　川上　優香
一八世紀初頭から一九世紀初頭のイギリスを中心としたフリーメイソンリーの研究　西田　悠人
ペレストロイカにおける「グラスノスチ」政策の登場とマスメディアの変化　橋本　拓海
オランダ東インド会社の栄光と崩壊及び日本との関係　三井　康平
フリードリヒ大王の軽部隊に対する規律思想の分析と社会的規律化の再考察　森脇　大樹
一四世紀スイスにおける盟約者団と連帯意識　小野田　葵
第二次ポエニ戦争期において、カプア及びタレントゥムに対し、ハンニバルが軍事協定を結ぶ必要性はなかったのではないか？　國屋　紘章
ウルナンム王讃歌とシュルギ王讃歌における神々との近親表現について―ウトゥヘガルとウルナンムの関係性に焦点を当てて―　中隈　大介
一六七〇～一六七一年の仏領植民地サン＝ドマングにおける白人反乱―コルベールと植民地総督オジュロンの政策―　フォーンクルック　貴博
ユリア事件―何故紀元前二年に追放されたのか―　川崎　早織
帝政ローマ初期（アウグストゥス帝時代）のグアダルキビル川流域に於けるオリーヴ油―アンフォラとその生産に関わった奴隷について―　近野　成美
前一世紀～後一世紀におけるオスティアの伝染病リスクの考察―テヴェレ川と沼地の影響の検討を中心に―　空　稚那

デキウス帝迫害の再検討
―ローマ宗教史の視点から―　萩原　将史
一一世紀末におけるビザンツ影響下のバルカン半島とそ
の実態―第一回十字軍史料におけるペチェネグ人を手
掛かりに―　橋口遼太郎
アドニア祭におけるヘタイラ　山村　舞
ヴィクトリア朝における女性の服装改革とサイクリング
―The Buckman Papers を通して―　内山くるみ
日英同盟期における英国の日本観　新井　澪
「ニグロ・リーグ」創設者ルーブ・フォスターと黒人差
別についての考察―シカゴにおける黒人新聞の分析
を通して―　大和久大志
第二次世界大戦期のサラエボにおける、各宗教コミュニ
ティの動向と人々の協力関係に見るサラエバンの精神
　奥山信二郎
一八世紀イギリスにおけるジョッキークラブが果たした
役割―『レーシングカレンダー』と『スタッドブック』
の分析を中心に―　小野田天馬
戦後ドイツのトルコ人問題
―ゾーリンゲン市の事例―　加藤　聖名
ケロッグ社の広告から見る一九世紀末アメリカにおける
シリアルの普及　刈田恵理子
オランダにおける移民教育の現状とその政策―ＯＥＣＤ
の調査報告書をもとに―　香田　里奈
フランス、アルザス地域のフロンタリエから見る
INTERREG PROGRAM の意義　高井　梨花
初期社会主義から見るサルダーの思想　刀根　聡平
食と農業から見る中世イベリア半島のキリスト教社会と
異教徒　宮田　瀬奈
ウクライナにおける飢餓（一九三二～三三）の農業集団
化とウクライナ化の関連性　宮本　諒
イギリスファッションにおける流行の変遷と民衆意識の
関連性―トーマス＝バーバリーの生涯―　久保真穂子
ドイツ・ナショナリズムが一八七一年のドイツ統一に与
えた影響―小ドイツ主義・大ドイツ主義が描いたドイ
ツ国家像―　馬場翔太郎
中立国における対独協力者とナチズムとの関係―「裏切
者」ヴィトクン・クヴィスリングを中心に―　平松　祥梧
ノルマン征服期のイングランド修道院
―ランフランクの慣習律を中心に―　市原　理仙
イギリス産業革命後の人材を育成した教育機関とイギリ
ス経済の関わり―様々な教育機関による役割分担的教
育―　長瀬　綾乃

〔民族学考古学専攻〕

大宰鴻臚館跡出土青磁褐彩の生産地再検討―胎土に黒点
を含むいわゆる懐安窯産中国陶磁における一考察―
　津久井　駿

近現代における寺社石灯籠の形態に関する分析―愛知県岡崎市をフィールドに―　菊池まどか
鎌倉時代における日本刀の形態と刀身彫刻の関係　近藤　優里
高松市におけるうどん店舗の出店分析　堀家　魁心
近世変形五輪塔に見る形式変化の基礎的研究―江戸府内における石塔の要素交換―　松井　智輝
離島における人々の水利用をめぐる発展の歴史―式根島を事例に―　渡邉浩史郎
ファイユムの書と古代エジプトのワニの図像表現　許斐さくら
古代エジプト第一八王朝における壁画の時期推定―マルカタ南「魚の丘」遺跡の彩画片を事例に―　逢坂　暖
関東江戸時代人のクリブラ・オルビタリア―身分・階層間における出現頻度の比較―　小林　有香
江戸時代人骨から見る骨梅毒　齊藤　令菜
通における鯨文化の創成　牧野　純
江戸時代人における側頭筋付着部形態の評価とその応用―増上寺子院群と崇源寺・正見寺遺跡を対象に―　森　瑛正
ビザンツ時代パレスチナ地域における建材装飾研究―まぐさ石装飾の分析をもとに―　松本　健佑
鉄器時代の南レヴァントにおける月神シン崇拝に関する研究―三日月の描かれたスタンプ印章の分析を中心に―　大平高太郎
スペイン・イスラム庭園における伝統の受容と変化―シリアウマイヤ朝期と後ウマイヤ朝期の比較を通じて―　荘野　純生
後期青銅器時代のラス・シャムラにおけるチャリオットのタイプについて　野曽原　建
西アフリカ音楽の日本における実践と受容　大内　あい
浴場・旅館・薬師堂からみる俵山温泉の外湯景観　江方　望佑
サンティアゴ巡礼路が生み出す多様な主体の繋がり　岩本　夏実
オセアニアのカヌーの素材と島々の植生　甲斐理紗子
横浜中華義荘の役割変遷―墓標の分布・銘文から見る華僑の根付き―　春日　佑仁
ハワイアンキルトの観光資源化　黒田恵美里
県外移住者の暮らしに沖縄「らしさ」は表出するか―横浜市鶴見区を事例として―　名取　莉愛
埋蔵文化財保護体制の展開についての多国間比較―『先住民と考古学』に着目して―　池田　桜子
石人石馬の変遷に関する研究　神尾　啓
国分僧寺と国分尼寺の位置関係に関する歴史地理学的考察　伊藤　周也
薄葬令が古代墳墓造営に与えた影響に関する考古学的研究　伊藤　遼河
古代東北地方における仏教受容の様相　坂倉　萌香
古墳壁画に描かれる四神・十二支・星宿の系譜に関する研究　高木　優花
中空動物形土製品の用途・機能についての研究　堤　優香

保存活用計画からみる文化財活用の動向

寺井　瑞季

彙　報